

松本宣郎編『世界歴史大系 イタリア史 1—古代・初期中世』山川出版社、2021 年

塚原義央

本書は、古代から近代に至るまでのイタリアの通史シリーズ全 3 巻の第 1 巻にあたり、古代ローマを中心としたイタリア古代史の紹介である。通常、古代ローマ史はイタリア史とは区別されて論じられることが多いが、本書では古代ローマ史をイタリア史の中に位置づけ、初期中世とともに描かれていることに特色がある。

本シリーズ全 3 巻の統括であり近代篇の編者でもある北原敦氏の序文が、シリーズ全体の見取り図を与える。そこではこれまでの国民国家の歴史を反省しつつイタリアでは 1860 年に現在の国家体制が成立したことに触れられ、その成立以前に「イタリア」の名称を持つ政治共同体ないし国家が存在しなかったことを問題視しながら、本シリーズでは古代ローマ史の中にイタリアを置くのではなく、イタリア史という観点から古代ローマ時代を考察する編集方針を取ったことに苦勞と特色があることが述べられている(ii~iii 頁)。全体は序章を含め全 7 章からなるが、のべ 13 名の執筆者が各章を担当する。

序章では松本宣郎氏が「古代イタリアの枠組み」と題して古代イタリア半島の自然環境や古代と中世の境界について、また以降の各章において取り上げられるテーマが三つのコンセプト、すなわち古代経済論、社会史および心性史、ソシアビリテ論によって叙述されていることが示される。

第 1 章では「先史時代からイタリア諸民族の興隆まで」と題して先史時代からエトルリア人や南イタリアのギリシア人について紹

介される。特にエトルリア人の記述については平田隆一氏の研究が反映され、謎が多いその起源から政体をはじめとしたその国制、宗教や言語をはじめとした文化についても詳細な記述がなされる。

第2章では「ローマの興隆」と題して王政期のローマから共和政初期の歴史が語られる。王政期の記述については平田氏が、共和政初期の記述については安井蒔氏が担当する。王政期の記述については初期のロムルスロムルスの記述はいうまでもなく、中期以降のタルクィニウス・プリスクスをはじめとしたエトルリア系の諸王の詳細な記述が目目を引く。また共和政初期史についてもコンスルをはじめとした公職制度の成立からローマと周辺都市との対外関係をはじめ、詳細な記述がなされる。公職制度については前5世紀に公職者増員の傾向が見られ、十二表法編纂のための十人委員もこの文脈の中に位置づけられる。

第3章では「共和政ローマの発展と内乱」と題して共和政中期から後期にかけてのローマの歴史が語られる。本章は毛利晶氏と砂田徹氏によって執筆されているが、両氏による共和政期の詳細な記述のみならず、砂田氏によるクリエンテラ関係といった共和政期ローマを語る上で重要な現象や、毛利氏によるローマの宗教に関する記述もなされている。Wissowaをはじめとした欧米の先行研究の紹介や、ユピテル信仰をはじめとしたローマの宗教祭事に関する記述が示唆に富む。

第4章は「帝政期のイタリア」と題してアウグストゥスから始まるローマ帝政期の記述がなされる。島田誠氏による帝政前期のローマ史の紹介のみならず、坂口明氏による同時代における社会身分についての記述や、島田氏と松本氏によるキリスト教をはじめとした

宗教史に関する記述もなされる。概略的な記述のみならず通説では前 27 年のオクタウィアヌスがアウグストゥスの称号を得て成立とされる帝政の成立について最新の研究成果ではそうではないといった点などが示唆に富む。

第 5 章は「イタリアの社会と文化」と題して、本村凌二氏と芳賀京子氏によって祭事のみならず剣闘士興行といった文化的側面、ならびにローマ美術についての記述がなされる。「1 イタリア社会の文人政治家」ではキケロー、アグリッパ、マエケナスというローマを代表する政治家たちにフォーカスを当て、それぞれが同時代においてどのような政治的役割を果たしたかを紹介するのみならず、その民衆観といった心性についても考察する。またアグリッパを軍人として、キケローおよびマエケナスを文人として捉え、後二者についてはキケローが表に出て公職者たらんとしたのに対し、マエケナスは舞台裏の陰で活躍することを潔しとし、権力のみならず権威の質を高めることに着目した点でマエケナスの目指すところがキケローより時代を見据えていたとする。

第 6 章は「古代末期から中世へ」と題してディオクレティアヌス帝期から始まる帝政後期から 7 世紀以降のアラブ人によるシチリア支配まで、古代末期から初期中世にいたるイタリア史が綴られている。いわゆる「古代末」論を踏まえつつ西欧中心主義を脱した新たな「初期中世」論であり、そのイタリア版でもある。この時代の当該地域に注目した論考は少ない。この第 6 章は、例外的に通史であるが、良質の通史である。

ここまで本書の概略を紹介してきたが、いくつか気付いた点について述べてみたい。まず一つ気付いた点として、法的な現象への言

及が簡易に過ぎる。例えば第 2 章で取り上げられる前 5 世紀の十二表法は国制史の中で触れられるに過ぎないが、その内容を含めもう少し踏み込んだ記述があるとなお良い。

また欧米の先行研究の紹介があるのは良いが、詳細な文献情報も記載するとなお良い。例えば第 3 章ではローマの詳細な宗教・祭事が紹介されるが、本文で Wissowa の研究が紹介されながらも注や巻末の参考文献で文献名の表記がない。

全体として読者を誰に設定しているのかが不明確である。大学での講義を前提として学生を想定しているのか、一般の社会人を想定しているのか、または大学院生以上の研究者を想定しているのか判然としないところがあった。先述の先行研究の紹介のところでも触れたが、欧米の研究を紹介しながらもその詳細な情報を記載しないのは、一見して研究者が持つ期待値を上げながらもその需要に応えられていないような印象を受けた。

またこれと関連して通説とは異なる最新の研究状況が紹介されるのは良いが、諸説が展開される中でどの見解を取るべきかが示されておらず、イタリア史をより詳細に知ろうとしている初学者が迷う可能性がある。例えば第 4 章でモムゼン以来通説となっていた前 27 年を帝政の開始と見る見解は、帝政前期の研究者の間ではほとんどない旨が記載されているが、それに代わるものとして前 23 年のアウグストゥスによる「属州総督に優越する命令権」の受託をもって帝政開始と見るか、そのような学説の存在を示唆しながらもそれが支持されるべきかについて執筆者の態度表明がなされておらず、当該文献の紹介もない (152 頁)。少なくとも執筆者がどの見解を取るかについて示されるべきであろう。

また本作を前作（北原敦編『新版 世界各国史 15 イタリア史』山川出版社、2008年）をアップデートしたものと捉えるべきか、もしくはこれとは全く異なるものと捉えるべきか、必ずしも判然としないところがあった。前作でも編者の北原敦氏が「イタリア史を『一国史』として叙述することの困難さ」を痛感したと述べているが、このような困難さは本作においても乗り越えられているようには見えない。しかしながら一人の執筆者では全時代をカバーするのは困難であり、各時代の研究者を集めて執筆するのは仕方ないであろう。このような困難さを理解した上で読者がある程度想定し、「一国史」のより効果的な語り方を探求する必要があるように思われる。また岩波書店からも全24巻構成で歴史講座が発刊され、こちらは本書とはまた違う問題設定がされているが、第3巻でローマ史が取り上げられるのは帝国と化した共和政後期から帝政期のみで、これに至る共和政成立から中期までの記述は存在しない（大黒俊二他編『岩波講座 世界歴史3 ローマ帝国と西アジア 前3～7世紀』岩波書店、2021年。同書については、本誌掲載の栗辻氏書評も参照）。この点、本書はローマ前史から共和政中期までの記述が詳細になされている点で対照的である。

以上、気付いた点を述べてきたが本書の特徴として、松本氏をはじめとするローマ史の碩学がこれまで論文などで主張した内容が、要約の形で明確化され示されている。これまでの一連の研究成果に触れる機会を提供し、読者は改めてその内容理解を深化させる機会を得ていくであろう。また末尾の参考文献には、初出にあたる書誌情報と、先行研究やその後の発展を踏まえた欧文の論考も並ぶ。さらに簡単ながら、論考へのコメントも付されている。章の末尾に注

記があるのは、研究者には助かる。統治者一覧や系図も整理に役立つ。索引は充実しているとは言えないが、有難い。難点として、地図が少ない。時代の幅が広く激動期のため難しいと思うが、都市・地域名になじみがない場合もある。

これまで本書について様々意見を述べてきたが、評者の指摘は本書が有する価値を下げるものではない。本書が今後のイタリア史研究のみならず、各国史の研究をさらに進展させることは間違いないであろう。